

愛知学院大学の宗教教育試論

——「建学の精神」のルーツを探して——

吉 田 道 興

(平成12年度～平成15年度 教養部長)

構成

はじめに 「宗教教育」

一、本学の宗教教育

二、積尊に学ぶ 仏教の基本的「修道」

三、部派仏教(学派仏教)の「修道」

(1) 三学

(2) 三十七菩提分法

(3) 『俱舍論』と『成唯識論』の修道

四、大乘仏教の「修道」

(1) 「六波羅蜜多」と「四摂法」の布施

五、禪の修道

(1) 『学道用心集』

(2) 『正法眼蔵』

おわりに

はじめに 「宗教教育」

周知のように本学は「私立」の範疇にはいるが曹洞宗の宗立大学である。本学の宗教教育は、教養部教養教育の中で必修科目「宗教学Ⅰ・Ⅱ」として設定しているものの、一種の「建前」(看板)としてあるだけで、後述するように十全なものとは言えない。

「宗教教育」に関し法律的には、戦前における「現人神(あらひとがみ)」「神国日本」の功罪による反省から、戦後になって政教分離となる。宗教は一応尊重され「信教の自由」(憲法20条3項)を保障されているが、国および国立の機関における宗教教育、その他の宗教活動は原則的に禁止されている(教育基本法15条2項〔旧9条2項〕)。すなわち公立学校における「宗教」は、社会の歴史分野の日本史A・B、世界史A・B、地理分野、倫理等の時間に哲学や思想の一種として取り上げられているにすぎない。つまり公立学校の宗教教育には、一定の規制が布かれているわけである。一方、私立学校における宗教教育は「道徳科目」と同じ位置づけで行われ、規制はほとんどないといえよう。

『学習指導要領』には、宗教教育に関して(一)宗教的知識教育と(二)宗教的情操教育、所謂「宗

教知識教育」と「宗教情操教育」の二種を挙げている。その他に私立学校における特定の宗教（仏教、キリスト教、イスラム、神道等）による「宗派教育」も可能である。その中「仏教教育」にしても宗教知識に属する「仏教一般教育（一般仏教教育）」、各「宗派教育」、宗教情操に属する「仏教情操教育」、「宗派情操教育」もあろう。宗教の基本的知識について教育を施す点に異論はないが、人格形成上有効とみなされる宗教情操教育に関しては教える側と教わる側の微妙な心情（信仰）に深く関わり、諸種の論議があつて容易に着点は見出されていない状況のようである。

一 本学の宗教教育

本学では、宗教学のテキストとして『宗教と人間』「《副題》真（まこと）の生き方を求めて」第二版〔愛知学院大学宗教研究会編《本学教員14名の執筆陣》、大東出版社、2005年3月〕を使用している。その冒頭に「建学の精神 伝統の中に躍動する本学の教育理念」（行学一体・報恩感謝。筆者稿、内容は割愛）を掲げる。本文には以下の三編の柱を立てた。

- (一) 宗教の世界 (1)現代人の生活形態と宗教、(2)宗教理解への道標、(3)世界の宗教、(4)現代人と宗教
- (二) 仏教の世界 (1)インド仏教、(2)中国仏教、(3)日本仏教
- (三) 禅の世界 (1)禅の概要、(2)中国の禅、(3)日本の禅、(4)現代と禅

以上の各編の後には「参考文献」を付す。その後に附録として(四)実践的人間学の勧め・(五)坐禅実習の心得と作法、末尾には地図（インド・中国）・禅宗法系図・索引がある。

学生が便利に利用できるように配慮工夫した。ただし、学生が喜んで受講しているかどうか、またわかり易くなっているかどうかは別問題であり、ここでは言及しない。なお、これとは別に上掲(五)坐禅実習とあるように春学期の終盤に永平寺の「一泊参禅」に備え、学内の坐禅堂で基礎的指導を行っている。テキストの使用と方法は、宗教学担当教員に一任しているが、「講義概要」のシラバスを見ると大半の担当者は「宗教知識教育」の線を実施していることが共通している。担当者の判断で曹洞宗の「宗派教育」にすべて当てることも可能であるにも関わらず、「宗派教育」の授業中に占める時間は、年間30時間中、何と1～6時間の範囲であり非常に少ない。筆者は両祖（道元・瑩山）の伝記等2時間ほどである。さらに数年前より大学自体の仏教儀式（降誕会・成道会・両祖忌・涅槃会）も教職員が参加して行うこともなくなり、内献と称して学院本部の講堂で一部の教職員で行っているだけである。教職員と学生が参加する仏教儀式は入学式、卒業式、開校記念式典の際、「三帰依文」（仏法僧の三宝に帰投依憑す）を唱え『般若心経』や『修証儀』をごく短い時間に限って読誦する程度である。全学的に

禅研究所および坐禅堂の学内外における有効活用も今いち。冒頭で「十全でない」と指摘したのはこのような面を含んでいる。

次に豊かな情緒や敬虔な心、平和を求める心を育み、時に感動的な「法話」等を伴う「宗教情操教育」の実態は、上記の担当者のシラバスを見る限り全く不明である。筆者の場合、授業にできるだけ各種の視聴覚教材を使用し、各宗教の開祖や宗祖の伝記や思想には感銘深いと思われる「逸話」類をいくつか盛り込むように努めている。特に釈尊の言行録として残る有名な『ダンマパダ』や『スッタニパータ』中に現代でも通ずる真理を含んでいる内容を採り上げ、解説を施し読み味をたうえに課した「感想文」中に感銘や共感を若干引き出した程度である。今後さらに多面的な工夫を加える必要を痛感している。

二 釈尊に学ぶ 仏教の基本的「修道」

「仏伝」史料において釈尊の「出家」の動機は、実母の死やシャカ族の支配者コーサラ国の圧迫、若き釈尊の感受性豊かな気質等の背景も考慮できるが、『(パーリ語) マハーパリニッバーナ・スッタタ』(漢訳「涅槃経」)によると名利(名誉・地位・財産・妻子)を捨て「善なるもの」(パーリ語「クサラ」)を求めて決意実行したものと伝えられる。自己愛が強く欲深い凡俗の到底及ぶところのものではない。

その「善」とは「自分のためにも他人のためになるもの(自利利他)」「(漢訳)義理」という意味である。大乘仏教でいえば、多くの人びとの利益幸福を実現するための実践である。また「出家」の逸話として一般的に知られている「四門出遊(遊観)」は、青年期の釈尊が生・老・病・死の「四苦」の克服(人生問題の解決)を目指したとされ、前掲の「善」を求めてと比較すると、おのれ自身のためにも思われるが、その先には「衆生済度(生きとし生けるものの救済)」の面を秘してのものと理解される。

一般に仏道修行(修学)は「証(さとり)」を得るためとされている。それは釈尊の「さとり」に由来し仏教の教理や教義が体系化されていく過程で形成された概念と思われる。「さとり」を表す語句が「(梵語) アヌッタラーサンミヤクサンボーディ(音写)阿耨多羅三藐三菩提」(無上正等正覚。単に正覚とも)であり、その内容が「縁起(梵語) プラティートゥヤサムートパーダ」(共生)・「中道(梵語) マドゥヤマー・プラティパド」(不偏中正)・「空(梵語) シューニヤター」(無実体)など(以上の語句の内容割愛)である。その結果、釈尊は「ブツダ」(真理の覚醒者、覚者・智者・道者と漢訳)と称される。つまり出家後より「さとり」(=智慧)に至る六年間の次第(向上門)とその後の伝道四十五年間の集大成(=慈悲)から「自覚覚他(自ら悟り他を覚らせる)」「覚行円満(覚りと教導が完備)」(向下門)、つま

り前掲の「出家」を目指した「善」・「自利利他」の目的、「衆生済度」が達成したといえるであろう。釈尊の真骨頂は後半生における慈悲の実践にあるといえよう。

釈尊の教化伝道に関する逸話として有名な「次第説法（施論→戒論→生天論→四諦八正道）」、「対機説法（事火外道三迦葉への「燃える火の法門」・愛子を失った母キサ・ゴータミへの「芥子の実収集」・長者シンガーラカへの「六方礼」・長者夫人スジャータへの「七人の妻）」、「譬喩」（弟子ソーナへの「弹琴（琴の音）」・弟子マールンクヤへの「箭喩（毒矢）」）等がある。すなわち、「次第説法」は身近な生活の基礎的な知識を確認させ、それを次第に積み上げ、専門的なレベルに引き上げていく一面があると思われる。また「対機説法」は「人を見て法を説け」といわれているように相手（学生）の力量（機根・能力や感性等の個性）を十分に把握してきめ細かに対処しなければなるまい。相手の苦悩（各種の劣等感・悲劇的な体験等）を十分に理解し、カウンセラーのように適切な言動をすることに努めることが必要であろう。

「弹琴」話は頑張り屋の学生が体調を崩し病になった場合、「張りすぎてもだめ、たるんでもだめ、ちょうどいいあんばいが一番いい」（詩：相田みつを。原「弹琴喩」）という教示は、「中道」をわかりやすく示すものであろう。さらに「箭喩」は理屈っぽく頑固な者には、今ここでなすべきことをなさなければ、傷つき命をおとすこともあり後悔することになるという教え。これら教化の一端は、釈尊の勝れた「教育者」の一面を知らされる。

三 部派仏教（学派仏教）の「修道」

仏滅約百年後、戒律に関する十ヶ条（十事）の対立から保守的な上座部と革新的な大衆部との二派に分裂、その後、最終的に二十部派となり、「部派仏教」（小乗二十部派）と称される。その特徴は、各教義を細かく分析するもので「煩瑣哲学」的面を強く有する。その面を最も多く有するのが上座部から派生した「説一切有部」である。なお大衆部から派生し展開したのが後の「大乘仏教」につながっていく。

仏道修行者の基本項目「三学（梵語）トリニー・シクサニー」とは、「戒学」（身に行い口に話し心に思う行為〔三業〕すべてにわたり悪を止め善を修す）・「定学」（禅定を修して心の散乱を沈め安静にする）・「慧学」（本能的欲望を制御し正しく真実を見極める智慧を身につける）をいう。なお、この「三学」の学とは、「学道（学び実践する）」の意味であり、単なる「学問」ではない。「三学」の次第順序として「戒（梵語）シーラ」（規則）を守ることにより「定（梵語）サマーディ」（瞑想）を助け、「定」の精神統一により心を研ぎ澄ませ「慧（梵語）プラジュニア」（智慧）に達し、仏道を完成するに至る。このように「戒」「定」「慧」の三者は、不即不離の関係にある。しかし、これに満足するのではなくさらに向上することが望ま

れ、「増上戒学・増上心学・増上慧学」が設けられる。その展開が「五分法身（無漏の五蘊）」である。つまり従来の「戒学・定学・慧学」の三学の上に「解脱（あらゆる束縛や執着から解放され）」と「解脱知見（その解脱を自覚する）」を備えることが必要とされる。そこまで到達すると聖者（無学位の阿羅漢）と称され、「仏陀」となる要素・条件が具備しているとされる。「無学位」の「無学（梵語）アシャクサー」とは、仏道を究め、迷いもなく学ぶべきものもなくなった境地に到達した者＝阿羅漢「（梵語）アールハットゥ」（応供者。信者の供養に対応できる人・聖者）をいう。それは修行者が「仏陀」に接近したことになるが、そう容易にその境地に到達できるものではない。

それを「無漏の五蘊」（漏「煩惱」の一かけらもない純真な心の状態をあらわす五要素（＝戒蘊・定蘊・慧蘊・解脱蘊・解脱智見蘊）と称す。すなわち身業（身体行為）と語業（言語行為）とが無漏清浄になることを「戒蘊」、空（あらゆるものに実体はないとし、執らわれ片寄りが無い）・無相（形姿や特徴づけるものがない）・無願（特別の目的欲求を持たない）の三三昧（三解脱門とも）を成就することを「定蘊」、正しく見、正しく知ることを「慧蘊」、尽智（智慧を尽し）・無生智（智慧を生ずることを超越し）および正見と相応する勝解（勝れた理解）を得ることを「解脱蘊」、尽智・無生智勝解を得ることを「解脱知見蘊」という。「蘊（梵語）スカンドゥハ」（積重）とは塊（かたまり）や類別・要素という意味であるが、修行者が時に「煩惱」を生じ後戻りして凡夫になるようなことは一切なく、日常生活の中でしっかりと「仏陀」の境地に至り、それに徹し続けていく状態である。

〔「仏陀」の境地に近いといえば、阿羅漢が保持するとされる超人的能力、すなわち三明（宿命明・天眼明・漏尽明）六通（神変通（神足通）・天眼通・他心通・宿命通・漏尽通）が想定できるが、ここでは割愛しておく。〕

上記の「三学」中、第三の「慧学」（さとの智慧を学び実践すること）に関し、これを三種に展開して説示されることがある。それを「三慧」という。すなわち聞慧（経典の教えを聞きさとの）・思慧（道理を思惟してさとの）・修慧（禅定を修してさとの）である。たとえば修行者（学生）には、講義を聴き本質的なもの（真理）を身につける者、道理を深め理論的にそれを身につける者、坐禅の深い思索の中でそれを体得する者がいることを指す。そのように学生には「知恵」を習得する三類型がある事をいうが、前提としていずれも前向きな姿勢と積極的な行動を伴っているのが特徴であることを強調したい。

なお、仏教では『（大乘）北本涅槃経』巻二十七師子吼菩薩品の「一切衆生悉有仏性、如来常住無有変易」の語句から、生きとし生けるものには生まれながらに「仏性」が備わっているとされ、仏菩薩の救済対象となり「成仏」する《理想論》がある。それに対し、唯識法相宗では「五性各別説」を立てる。その五性（声聞定性・縁覚定性・菩薩定性・不定性・無性）中、

声聞・縁覚・菩薩の三乗に相応するものは、いずれ阿羅漢果・辟支仏果・仏果を各々得る。右の三乗にまだ定まっていないもの「=不定性」もいずれ上記のいずれかを得て成仏する。しかし、仏性がないもの「無性（無仏性）」〔一闍提（梵語）イッチャンティカ〕は「成仏」しない《現実論》がある。例外として「無性」にも「大悲闍提（菩薩の一面、慈悲心を持つ）」は「成仏」の可能性がある。これに関しては中世に天台宗と法相宗との間に論争があり決着がつかない。要するに仏教の説く「人間観」の類別として以上のような「成仏」の有無による理想論と現実論として二種の考え方があつた事を挙げておきたい。

翻って現代、何の目的もなくただ何となく大学に入り、漫然と講義に出ているだけで勉強もほとんどしないという消極的な学生が最近増えている。そのような学生に対し、教員はどう対処すべきであるか。当然ながら能力や意気込みの違う多種多様な学生が入ってきている以上、夫々の個性に対応する指導を綿密に工夫する必要性を確認しておきたい。教員としての吾人は、目的もなく意欲もない彼らを決して放置や無視はできないのである。

仏教では、上記の課題（能力別）について示唆的な項目を設定していると思われるのが「三十七菩提分法（三十七道品とも）」である。これらは菩提（真理）を究める実践修行方法である。ここでは一般仏教の基本的叙述に止め、その教育上の現代的活用は今後の課題としたい。道元禅師の著『正法眼蔵』「三十七品菩提分法」巻は後にその一端に触れる。

(1) 四念処（四念住）とは、道理に反する四種の顛倒「常」（ものや心は変わらない）、「楽」（心は安楽である）、「我」（自我やものは常住している）、「浄」（身は清浄であるという）を否定するものである。「顛倒（梵語）ヴィパリータ」とは正しい道理に反すること。それに「身念処」（肉体は不浄である）、「受念処」（感覚感性の感受は苦である）、「心念処」（心やものは無常である）、「法念処」（すべての事物は無我である）の四種を観察し想念する修行であり、「四念処観」とも称す。基本的には、「四法印」（諸行無常・諸法無我・一切皆苦・涅槃寂静）中の第一「無常」・第二「無我」の徹底的な認識を求めているといえよう。

(2) 四正勤（四正断とも）とは、「律儀断」（まだ生じていない悪を生じないように努める）、「断断」（すでに生じている悪を断ち切るように努める）、「随護断」（まだ生じていない善を生じさせるように努める）、「修断」（すでに生じている善を増幅させるように努める）である。

(3) 四神足（四如意足とも）とは、神通力（禅定による超人的能力を構成する単位）の四種であり、それに「欲神足」（意欲）、「心神足」（心念・心のすべて）、「進神足」（まっすぐに進む向上心）、「思惟神足（最も深く禅を思索観察する）」がある。これら四種の「精神」を自由自在に機能させる訓練といえよう。

(4) 五根とは、感覚を起こす器官や能力の五種であり、それに「信根」（信心）、「精進根」（常に努力する）、「念根」（思念）、「定根」（禅定）、「慧根」（智慧）がある。これら五種の感

覚・知覚を研ぎ磨くことである。

(5) 五力とは、煩惱を破り悟りへ導くすぐれた働きをなす五種の心情であり、それに「信力」(信仰)、「精進力」(努力)、「念力」(憶念)、「定力」(禅定)、「慧力」(智慧)がある。この(4)と(5)の項目は同じであるが、『俱舍論』では「根」は加行道(予備行)第三忍位(怠惰がない段階)、「力」は世第一法位(予備行の最後、世法の最勝位・無漏智の手前)として修行段階の違いを説示している。

(6) 七覚支とは、「さとり」を得るための手足となって役立つ方法の七種「擇法覚支」(真をとり偽を捨てる)、「精進覚支」(真を択びとった後に専念努力する)、「喜覚支」(真法を行じ喜悅に住す)、「除覚支」(心身を常に快適に保つ)、「捨覚支」(何事にも執らわれない)、「定覚支」(精神統一し散乱しない)、「念覚支」(常に禅定と智慧を念じている)である。

(7) 八正道(八聖道・八正道支とも)とは、四つの真理を意味する「四諦」(苦諦・集諦・滅諦・道諦)中の第四道諦の展開である。「正見」(正しく四諦の真理を見る)、「正思惟」(正しく四諦の真理を思惟する)、「正語」(正しく真実の語句をいう)、「正業」(正しい行動をする)、「正命」(正しい生活をする・正しい職業に従事する)、「正精進」(正しい努力を続ける)、「正念」(正しい記憶念を保つ)、「正定」(正しい禅定・精神統一・瞑想をする)の八種の実践項目は原始仏教時代からの普遍的な徳目と言え、今日でも充分に通じる。

部派仏教の成果(綱要書)ともいうべきテキスト『俱舍論(梵語)アビダハルマコシャ・シャーストラ』(音写「阿毘達磨俱舍論」)では、体系的に「修行位次(段階)」を設定している。概略的に項目を示せば、修行者を大きく「賢」(善和)と「聖」(正和)の二種に分ける。「賢」とは善をおこない煩惱を制御し精神の調和を図る意味、「聖」とは清浄な正智を起こし「四諦」の正しい真理に到達する意味である。そのための修行徳目として「賢」には、三賢(五停心・別相念住・総相念住)と四善根(煖・頂・忍・世第一法)の七加行を立てる。次に「聖」には預流・一來・不還・阿羅漢に各向・各果があり、預流向は見道、預流果から阿羅漢向は修道、阿羅漢果を無学道とする。その三道(見道・修道・無学道)中、見道(知的見解)と修道(実践的体験)のうちはまだ「有学」であり、無学道〔「無学」(既説)〕に至り成就する。見道には十六心の観法(聖諦現観)中の第一心より第十六心までの範囲における観法を指し、その第十六心「道類智」に至ると三界の見惑八十八使が断尽し次の修道に進む。この修道では、修所断の煩惱(修惑・思惑八十一品)を絶ち切る過程が煩瑣極まりなく説示され、「三阿僧祇百大劫」を要すとされる。

上記『俱舍論』の修道と併称され、「権大乘」(実大乘から批判される)に属す『成唯識論』の修道がある。その唯識法相宗でも前掲の『俱舍論』と同様に煩惱の断惑・断道が説かれる。それに三種の断(自性断・離縛断・不生断)やその段階である現行(現実生活の行動・善悪の

思想)を制伏し、「種子(梵語)ピージャ」(すべての現象を生じさせる根源的可能性・潜在的勢力)を断尽し、習気(習慣性)をも棄捨する(伏・断・捨)も同様である。多少相違するのは、修道の階位である。それには声聞の修道(三生六十劫を要す)・縁覚の修道(四生百劫を要す)・菩薩の修道(三大阿僧祇劫を要す)がある。

一般的修道には「五十二位」(十信・十住・十行・十回向・十地・等覺・妙覺)がある。また「四十二位」という場合、十信を十住の初位に接する。それを元に慈恩大師は等覺を第十地に接して「四十一位」と設定している。これを五位(資糧位・加行位・通達位・修習位・究竟位)に分け、資糧位と加行位の二位を「方便道」、通達位と修習位の二位を「無漏聖道」とし、究竟位を「仏果位」とする。「四十一位」中の十住・十行・十回向の初三十心は「資糧位」(順解脱分とも)、十回向の満心第十法界無量回向位に至ると「加行位」(順決択分とも)、十地の初位極喜地に至ると「通達位」(見道とも)、右の見道から仏果を得る間に種々の修習をして「三大阿僧祇劫」という無限に近い修道を経て仏果妙覺の位に到達する位が「究竟位」である。『俱舍論』や『成唯識論』の修道論は、時空を超越するような長く厳しいものであり、現代人には実際に不可能で現実味に乏しいものと思われる。ここでは単に項目を列記するに止める。

四 大乘仏教の修道

部派仏教の学僧による学問追究の姿勢が一般民衆の願望から乖離する面の批判や反省から自然と派生したのが大乘仏教と言える。「大乘(梵語)マハーヤーナ」とは、大きな乗り物(大船)という意味。多くの人々を救うための乗り物で、その担い手(船頭)が「菩薩(梵語)ボディサットヴァ」(求道者・真理の追究者)と称される。その「菩薩」は、釈尊の「前生譚(梵語)ジャータカ」において国王をはじめいろいろな動物等に姿を変えて種々の善業功德を積んだ説話に投影されているように所謂「慈悲(梵語)マイトレーヤ、カルナー」(友情、同情)の具体的行動をする人である。例えば、法隆寺の玉虫厨子扉に描かれている「捨身飼虎」のように王子が自分の命を捨てて飢えた虎の親子を救ったり(『金光明経』)、「施身聞偈」では帝釈天が羅刹に身を変えて「無常偈」の前句を唱え、それを聞いた雪山童子が後の句を聞くためにおのれの身を施したという逸話(『涅槃経』)である。いずれも「慈悲」心(思いやり)の発露と実践といえます。いわば「自未得度先度他(自ら未だ度せざるに先に他を度す)」ということ、「度(梵語)パーラミター」(音訳「波羅蜜多」)は「渡」と同義で「わたる」「わたす」「到彼岸」「救済」の意味である。

大乘仏教の代表的修行徳目として有名なのは、「六波羅蜜多」(布施・持戒・忍辱〔忍耐〕・精進・禪定・智慧)であり、これを「六度」ともいう。このうち第一の「布施(梵語)ダー

ナ」(音写「檀那」、「ほどこし」の意)が重要視される(他の五項目は割愛)。

一般に「布施」には、「財施(信者による財物のほどこし)」と「法施(僧侶の説法)」の二施、ないしこれに「無畏施(諸種の恐れを免れさせる)」を加えて三施という。信者に財物がない場合、「無財七施」として「眼施(優しいまなざし)」、「和顔悦色施(穏やかな笑顔)」、「言辞施(思いやりのことば)」、「身施(礼儀にかなった身のこなし)」、「心施(善意のこもった真心)」、「床座施(自然に座席を譲る)」、「房舎施(困っている人に宿泊させる)」(『雑宝蔵経』六卷)が説示されている。「布施」で大事なことは、「施物」と「施者」と「受者」との三者間に差別があってはならず、すべて「清浄」でなければならない。それを「三輪清浄」「三輪空寂」という。つまり自我や名利が絡み、分け隔てがあると「不清浄」というわけである。

「六波羅蜜多」と同類の実践項目として「四摂法(四摂事・単に四摂・四事・四法とも)」(布施・愛語・利行・同事)がある。「布施」は前述の通り。「愛語」とは、やさしく慈愛のこもった言語。時にはきつく叱り、時にはなだめる・ほめることも必要。「利行」とは、人々に利益を与えること、相手のためになること。「同事」とは、相手と同じ立場に位置すること、協同すること。この「四摂法」は前掲の「六波羅蜜多」よりも全体の構成がよく取れていて実践しやすいように思われる。関連の『正法眼蔵』「菩提薩埵四摂法」巻は後述する。

ところで自分の命を他人を救うために捧げるという行為は、容易にできるものではない。しかし、昨春三月十一日に生じた東日本大震災の際、その「菩薩行」をなした方々が複数おられたことが報道により知らされた。宮城県南三陸町役場に勤務していた女性職員は、逃げる時間があったにもかかわらず防災放送のアナウンスをして最期まで避難を呼びかけ大波に吞まれ犠牲になられた。同様に宮城県警の巡査部長と巡査五人はパトカーで避難誘導中に津波に巻き込まれ殉職されている。岩手県大槌町の町長さんや消防団の団長・団員の方々は避難を呼びかけ、また半鐘を鳴らし続け殉職している。これらの方々は、自分よりも不特定多数の人々の命を大切にされたのである。他にもおおいなる勇気を発揮した方が多勢おられたことでしょう。この紙上を借りすべての犠牲者のご冥福をお祈りしたい。

五 禅の修道

中国禅では、参禅学道の基本として「参師聞法・工夫坐禅」(参師問法・功夫坐禅とも)が大切にされる。優れた指導者(師家)を諸方に尋ね旅(行脚)をする。これらと思う人物に邂逅すると種々問答を交わし、互いに力量を把握したうえで師匠と弟子の関係(師資相契)を結び、本格的な修行が始まる。修行の中核となるのが「坐禅」の工夫である。その他に唐代の禅僧百丈懷海の指導理念である「一日不作、一日不食」の教示のように農作業等の労働(作務)

が課されることもある。修行者は必死に個性豊かで抜群な師家を探し求めたのである。その傾向は唐代から宋代にかけて盛んに行われ、「師家崇拜」の傾向が生じた。

それが「五家（七宗）」の家風・宗風として伝承され、禅宗の隆盛時代となった。南宋代の禅僧高峰原妙による五家の「評」（特徴）として臨済宗の「痛快」（気鋒峻烈で殺活の機用を現わす＝大機大用・個性の尊重）、曹洞宗の「綿密」（行解相応し行業綿密＝親切丁寧な指導）、滄仰宗の「謹嚴」（謹嚴な応酬の中に師弟默契す＝師弟間的人格尊重）、雲門宗の「高古」（奇警な言句を拈じ取捨分別の衆流を止め＝言句を超えた真理の体得）、法眼宗の「詳明」（教家の句意を活用し禅侶を除く＝教禅一致の推進）が挙げられる。この中で後世までその法系が続いたのがスパルタ教育式に「棒」「喝」を多用した臨済宗とこの世において平等（明）と差別（暗）の両面が互いに相即相入している真実のありようを親密に教授・受容していった曹洞宗である。特に臨済宗は公案（看話）の知解を重視し、曹洞宗は打坐（黙照）の実践を重視している。こうした流れが日本禅にも引き継がれている。これら五家の家風・宗風は、謂わば教育法・教育手段として参考になり得るのではなかろうか。一考を要するところである。

道元禅師は「正師」と「正法」を求め留学（入宋）、五年ほど滞在し帰朝した後、建仁寺仮寓中に正師如浄禅師の膝下で坐禅により「身心脱落」（坐禅の当体がそのまま悟証の姿。修証一等）した成果として『普勸坐禅儀』を撰述、続いて、正法（正伝の仏法）の立教開宗の宣言ともいべき「辨道話」を著わした。その後、深草興聖寺時代にライフワークとなる『正法眼蔵』の表題を冠した「摩訶般若波羅蜜」巻等、一連の諸巻が著わされていく。そうした中、「正法」を護持する弟子の養成書として天福二年（1234）春に撰述したのが『学道用心集』（原漢文）である。題名の意味は文字通り「学道（学仏道）」の「用心（心を用いる、注意・心得）」を集成したものである。以下、各章の内容を略述してみよう。

第一、菩提心を発すべき事

修行の初めに菩提心を発す（発心・道心）こと、それは「無常を觀ずる」ことである。それはあたかも「頭燃」を救う（払う）ようにすぐに実行することが肝要と示される。「頭燃をはらふ」の句は、『正法眼蔵』「重雲堂式」「礼拜得髓」「行持」等にも使用され、「菩提心」と密接に関連する。同書には、同じ課題の「発菩提心」「道心」の諸巻がある。

第二、正法を見聞して必ず修習すべき事

発心の後、正師に随従し正法を正しく見聞して、「真実」を身と心に刻みこむこと。

第三、仏道は必ず行に依って証入すべき事

「学べばすなはち禄その中にある」如く「行ずればすなはち証その中にあり」である。それは『辨道話』の「仏法には、修証これ一等なり」や「本証妙修」と同意。

第四、有所得心を用って仏法を修すべからざる事

世法のおのれや「名利」のためではなく、仏法（真理）のために仏法を追求すること。

第五、参禅学道は正師を求むべき事

上掲の第二と重なる。「機（学生）は良材の如く、師（指導者）は工匠に似たり」の譬喩のように学生の成長は指導者次第である。その正師とは、次の七種の資格を備えているという。(一)年老の多少（修行の長短）は問わない、(二)正法を覚り正師の法（印証）を嗣いだ者、(三)文字（文章）や解釈を先とせず抜群（格外）の力量を有している、(四)並外れた（過節）の志気が溢れ、(五)我見我執を離れ、(六)情識（感情）に滞らず、(七)行解が相応している。これら「正師」の資質は現代においても必要なものといえよう。

第六、参禅知るべき事

まず参禅学道は易行ではなく難行であること、次に仏法の一大事は身心を調整し坐すこと、つまり「調身、調息、調心」の上に「端坐」すること（＝只管打坐）である。

第七、仏法を修行し出離を欣求する人、須らく参禅すべき事

同じく坐禅の注意、文字の教網を離れ思量分別を捨て実参実究することが肝心。

第八、禅僧行履の事

ここでは「正法」のあり方、中国禅の代表的祖師たちの行実・逸話を挙げ、不退転の心で精進すべき事を督励している。

第九、道に向かって修行すべき事

「道」とは人間が真実に生きること（仏道）、つまり「自己本道中」にあつて迷惑せず、妄想せず、顛倒せず、増減なく、誤謬なしということに信ずべし」と述べる。この信に立ち仏道を行ずること。真実を求め生きる自分自身を固く信ずることでもある。

第十、直下承当の事

集約的にいえば「参師聞法、功夫坐禅」の教示をそっくり受け継ぎ、「本来の自己」に目覚め、「修証一等」の坐禅に徹すること。それは「安楽の法門」すなわち邪心なく、執らわれ・こだわり・偏りなく無心に坐に打ち込むことによって得られる境地である。

道元禅師は、修行僧の心得として他に『衆寮清規』（二七カ条にわたる衆寮〔坐禅堂〕の威儀進退等の垂範）、『典座教訓』（典座〔食事を司る職〕の心得、六味完備の用心）、「赴粥飯法」（粥や飯の食事作法）等も撰述、詳しく述べているが、ここではすべて割愛する。

次に『正法眼蔵』諸巻から「学仏道」に関連する巻を適宜抜粋して概説してみよう。

「仏教」巻

仏教の中で「禅」は「教外別伝」として文字や経典を排斥すると言われるが、それは「謬説」（あやまり）であるとして「上乘一心」（大乘の異名）の「三乗十二分教（十二部教とも）」および「九部経」を示す。「三乗」とは仏道を行ずる三種の機根であり、「声聞乘」（仏弟

子の声聞は「四諦」により得道す、「縁覚乗」(縁覚〔独覚〕は「十二因縁」により般涅槃す)、「菩薩乗」(菩薩は「六波羅蜜」の教行証により正覚を成就す)である。「十二分教」とは、(1)「契経(梵語) スートラ」、(2)「重頌(梵語) ゲーヤ」、(3)「授記(梵語) ヴヤーカラナ」、(4)「諷頌(梵語) ガーター」、(5)「無問自説(梵語) ウダーナ」、(6)「因縁(梵語) ニダーナ」、(7)「譬喩(梵語) アヴァダーナ」、(8)「本事(梵語) イティヴルツカ」、(9)「本生(梵語) ジャータカ」、(10)「方広(梵語) ヴァーイプルヤ」、(11)「未曾有(梵語) アドブタダルマ」、(12)「論議(梵語) ウパデーシャ」である。「九部経」とは、この中の(3)(5)(10)を除く残りの九項目である。道元禪師は「これみな仏祖の眼睛、骨髓、家業、光明、莊嚴、国土。十二分教をみるは仏祖をみるなり。仏祖を道取するは十二分教を道取するなり」(趣意)と述べ、文字・経典を重要視しているのである。単純な「不立文字、教外別伝」を超越した立場である。

「仏道」巻

「学仏の道業(仏道を学び実践する)」を「正伝(正しく伝承する)」上において「禪宗」「禪祖」「禪師」「禪和子」「禪家流」さらに「達磨宗」「仏心宗」および「五家(七宗)」等の呼称は使うべきではない。これらの呼称ではなく、道元禪師は次のように述べられる。「吾れに正法眼蔵涅槃妙心あり」「仏仏祖祖付属し正伝するは正法眼蔵無上菩提なり」、「諸仏無上の妙道なり」として、一宗一派の呼称に拘泥するのではなく「正伝の仏法」を受容し継承しているとの自覚(自負)・認識に立っていることを知るべきである。

「仏経」巻

「学仏道」の根底には、「知識」(師匠)と「経巻」(教法)がある。道元禪師は、「西天東地(インドと中国)の仏祖、かならず或従知識、或従経巻の正当恁麼時、おのおの発意、修行、証果、かつて間隙あらざるものなり」と述べる。「知識」と「経巻」に恵まれていると有難いことに、発心し修行し悟るという過程には隙間なくつながっている。特にその「経巻」は所謂テキストだけに限定されるものではない。「いはゆる経巻は、尽十方界これなり。経巻にあらざる時処なし」とあるようにこの宇宙(大自然)のすべてが「経巻」となり、学ぶ対象になるわけである。同類書「看経」巻の叙述は略する。

「行仏威儀」巻

仏道や禪の修行の中核には「坐禅」がある。しかし、修行はすべての行為「四威儀」(行・住・坐・臥)に関わる。道元禪師は、「諸仏かならず威儀を行足す、これ行仏なり」と喝破する。諸仏はなす威儀・行為そのものを行じ尽くすことにより「行仏」という。仏道を行ずることが「仏行」であり、その当体が「行仏」である。換言すると日々の行いのすべてが仏道にならなっているから仏道が一切の時処に応じ現成することになる。「即仏即自」(仏即自己、自己即仏)の体験は容易には得られないであろう。凡俗があれこれ迷いがちな「生死」の問題に関

し、「しるべし、生死は仏道の行履なり、生死は仏家の調度なり」、「大聖は生死を心にまかす、生死を身にまかす、生死を道にまかす、生死を生死にまかす」という。生死の繫縛から解放されたところに着点がある。「法説仏なり、法行仏なり、法証仏なり、仏説法なり、仏行仏なり、仏作仏なり」とは、「仏行」の展開した姿といえよう。

「行持」巻（上下あり）

この「行持」の「行」とは「行仏」ないし「仏行」の意、「持」とは「護持」の意である。この巻にはインド・中国の三十人（馬祖は2回）に及ぶ「仏祖」の行実・逸話を解説している。その冒頭には「仏祖の大道、かならず無上の行持あり。道環して断絶せず、発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、行持道環なり」とある。よく似た文節は前掲の「仏経」にあったが、それを発展している。「諸仏諸祖の行持によりて、われらが行持見成し、われらが大道通達するなり。われらが行持によりて、この道環の功德あり」と述べ、その諸仏の「発心・修行・菩提・涅槃」を行わずることにより、我々の行持が現れ、かつ大道に通達し、その功德が現れるというように、仏祖の「行持」が今に至るまで繋がり続いているのである。限定的にいて「しかあればすなはち、一日の行持、これ諸仏の種子なり、諸仏の行持なり」というのは、一日のあらゆる起居動作を諸仏の現れる種子（もと）であり、諸仏の行持として学道者が行わずすることを促しているといえよう。

さらに「只ながく名利をなげすてて、万縁に繫縛せらるることなかれ。光陰を過ぎさず、頭燃をはらふべし。大悟を待つことなかれ、不悟は髻中の法珠なり」とは、凡俗のように名利や俗縁に執らわれ縛られるのではなく、仏道において寸時も惜しまず大事に過ごし、「悟り」を得ようとしないうこと、その「不悟」こそ髻中の法珠であると述べる。これは「修証一等」・「証上の修」の立場から修行において「さとり」すら求めないという大乘仏教の立場「無所得」「無所悟」および「空」の面からの説示である。

また「身命は無常にまかす、主君にもまかす、邪道にもまかす。しかあれば、これを挙して報謝に擬するに不道なるべし、ただまさに日々の行持、その報謝の正道なるべし」「いはゆるの道理は、日々の生命を等閑にせず、わたくしにつひやさざらんと行持するなり」と述べられるのは、身命を無常（死）や主君・邪道に任すしかない。そうであれば身命を報謝に充てようとしても道に適（かな）わない。ただ正に日々の学道（修行）を護持してなすことが報謝の正しい実践となる。すなわち、その道理として日々の生命をなおざりにせず、自分のみ費やしてならない（世のため人のためとして）修行を護持していかなければならない、という。「縁起」の道理（相互依存性・共生）の立場からも、この宇宙・環境問題・人間との関係、および「生命」等を考慮する上で誠に示唆的な教示といえよう。またここに、本学の建学の精神にある一つ「報恩感謝」の原点があるように思われる。

その感謝報恩の対象は、前述したように「縁起（共生）」の思想に基づくものであり、『(大乘本生)心地観経』の四恩（父母・国主・衆生・三宝）、および『六方礼経』の六方である東西南北上下に「父母」「夫また婦」「師匠」「朋友」「奴婢（召使）」の「六恩」に及ぶものである。現代では、「無償の行為」（ボランティア）に通じ、その普及にも尽力すべきである。

「身心学道」巻

仏教において身と心の関係は「身心一如」である。ここの「身心学道」巻では、それを仮に「仏道を学習するにふたつあり」として「心をもて学し」（心の学道）、「身をもて学す」（身の学道）と設定して説かれる。

まず「心の学道」とは、「あらゆる諸心」で学ぶことで、その諸心として「質多心（梵語）チッタ」（慮知心）、「汗栗駄心（梵語）フリダヤ」（草木心）、「矣栗駄心（梵語）同右」（積聚精要心）等を挙げる。具体的には、「発菩提心」「赤心片々」「古仏心」「平常心」「三界一心」に関する説示である。このうち「発菩提心」の「菩提心発なり、発菩提心なり」の時節と共に自発的に生ずる尊さを感じ、しめじみと感じる。〔この巻の前半の展開が「十二巻正法眼蔵第四・発菩提心」（草案）であると想定できる。〕また「平常心」の箇所に「発心すれば、かならず菩提の道にすすむなり。すでにこのところあり、さらにあやしむべきにあらず。すでにあやしむところあり、すなはち平常なり」には何か力づけられ安心感がえられる。

「身の学道」とは、「赤肉団（赤裸々な肉体）の学道」として「尽十方界、真実人体」と「生死去来、真実人体」に関する説示である。「尽十方界、真実人体」とは、この宇宙を真実の人体（本体）と体得すること、同じく「生死去来、真実人体」も生死去来する現実の中でその本質を体験すること、宇宙と我（自己）との一体を要請しているわけである。

注釈書『御聴書』には、「自己の身心は仏道・真理の現成であることを参究、修証せよとの義」であると述べている。「身心学道」巻、これも本学の建学の精神の一つ「行学一体」（修行と学問の一致）と関連することになる。

「仏向上事」巻

「仏向上事」とは、「さとり」を得て仏になっても、さらにその先の修行を継続することをいう。「さとり」済ましてはならない、「仏」であって「仏」を忘れ、「超仏越祖」（仏祖を超越する境地=殺仏殺祖）に達することである。修行に終わりはないのである。

巻末に「いはゆる仏向上事といふは、仏にいたりて、すすみてさらに仏をみるなり」とある。続いて「衆生の仏をみるにおなじきなり。しかあればすなはち、見仏もし衆生の見仏とひとしきは見仏にあらず。見仏もし衆生の見仏のごとくなるは、見仏錯なり。いはんや仏向上ならんや」とは、仏向上のひとが仏を見るのは、衆生が仏を見るのと同じであるが、衆生が仏を見ると等しくはない。仏を見るということ自体錯（あやまり）である。まして仏向上であろう

か、それはとんでもない」という。要するに「学道者」の向上事による「見仏」と一般衆生の「見仏」とは天地懸隔しているというわけである。

それは巻初に「仏向上にいたらざれば仏向上を体得することなし、語話にあらざれば仏向上を体得せず。相顕にあらざ、相隠にあらざ。相与にあらざ、相奪にあらざ」と述べるように師匠と弟子間の「語話（＝問答）」において互いに顕れたり隠れたり、与えたり奪ったりするのではない。その「語話」の現成する時に「仏向上事」があるという趣旨に通じている。

「発菩提心」巻（十二卷本正法眼蔵、第四）

『修証儀』第四に引用されている「菩提心をおこすといふは、おのれいまだわたらざるさきに、一切衆生をわたさんと発願しいとなむなり。そのかたちいやしといふとも、この心をおこせば、すでに一切衆生の導師なり」をはじめ、「衆生を利益すといふは、衆生をして自未得度先度他のところをおこさしむるなり。自未得度先度他の心をおこせるちからによりて、われほとけにならんとおもふべからず。たとひほとけになるべき功德熟して円満すべしといふとも、なほめぐらして衆生の成仏得道に回向するなり」、「しかあればすなはち、たとひ在家にもあれ、たとひ出家にもあれ、あるひは天上にもあれ、あるひは人間にもあれ、苦にありといふとも、楽にありといふとも、はやく自未得度先度他の心をおこすべし」等と述べ、吾人が「菩薩行」（世のため人のために尽くすこと）に徹する必要を強調しているのである。

「道心」巻（『秘密正法眼蔵』底本。岩波文庫本、四付巻）

上記と同義の「道心」巻には、冒頭近くに「世のすゑには、まことある道心者、おほかたなし。しかればども心を無常にかけて、世のはかなく、人のいのちのあやふきこと、わすれざるべし。われはよのはかなきをおもふと、しらざるべし。われは世のはかなきことをおもふと、しらざるべし。あひかまへて、法をおもくして、わが身、我がいのちをかるくすべし。法のためには、身もいのちもをしまざるべし」との文節は、ほとんど解説を加える必要はないであろう。特にいえば「道心（＝菩提心）」と「無常心」の密接な関係がここでも繰り返して示されていることである。

「三十七菩提分法」巻

部派仏教の箇所において既述している項目である。ここでは大乘仏教の立場にある道元禅師の説示を概説したい。これは一般に「涅槃（＝さとり）」に至る助道法として扱われるが、禅師は「仏道」上における「さとり」の仏行・仏祖正伝の「法」として展開する。

そこで「四念住」（四念処とも）の(一)「観身不浄」、(二)「観受是苦」、(三)「観心無常」、(四)「観法無我」だけを抜粋して述べる。これは基本的に「四顛倒」（常・楽・我・浄）の克服する観法であるが、逆に「涅槃」の四徳（涅槃の不変不遷＝常、生死の二苦を離れ安穩＝楽、妄執を離れ大自在を得る＝我、迷惑を離れ湛然清浄＝浄）を得ているかのような境地を説いているの

である。すなわち意識的にいえば、(一)仏道修行者はそのまま「さとり」・「水濁知有魚」の道理・(二)苦が生きている証拠としての受(感受性)の働き・「苦これ受なり」、(三)観ずる心が無常(=仏性)・「無常者即仏性也」、(四)あるがままを受けとめる「長者長法身、短者短法身・「現成活計なるがゆゑに無我なり」となる。人生を消極的に受け止めるのではなく、積極的に生きることを提唱するのである。換言すれば坐禅は証(さとり)の上の修行であるということ。『菩提薩埵四摂法』巻(六十巻本正法眼蔵、第二十八。岩波文庫本、四付巻)

この項目は、「六波羅蜜多」の箇所です。簡単に触れた「布施・愛語・利行・同事」である。次に説示するのは、明治時代に『修証儀』として集大成される文節である。ほとんどは解説する必要はなかろう。まず「布施」。「その布施といふは不貪なり。不貪といふは、むさぼらざるなり。むさぼらずといふは、よのなかにいふへつらはざるなり」、「我物にあらざれども、布施をさへざる道理あり。そのもののかるきをきはらず、その功の実なるべきなり」、「ただかれが報謝をむさぼらず、みづからがちからをわかつなり」、「舟をおき、橋をわたすも、布施の檀度なり、(中略) 治生産業もとより布施にあらざることなし」。

次に「愛語」。「愛語といふは、衆生をみるにまづ慈愛の心をおこし、顧愛の言語をほどこすなり。おほよそ暴言の言語なきなり。(中略) 慈念衆生、猶如赤子のおもひをたくはえて言語するは愛語なり。徳あるはほむべし、徳なきはあはれむべし」、「むかひて愛語をきくは、おもてをよろこばしめ、こころをたのしくす。むかはずして愛語をきくは、肝に銘じ、魂に銘ず。(中略) 愛語よく廻天のちからあることを学すべきなり、ただ能を賞するのみにあらず」。

「利行」。「利行といふは、貴賤の衆生におきて、利益の善巧をめぐらすなり。(中略) 窮亀をみ、病雀をみしとき、かれが報謝をもとめず、ただひとへに利行にもよほさるるなり。愚人おもはくは、利他をさきとせば、自らが利、はぶかれぬべしと。しかにはあらざるなり。利行は一法なり、あまねく自他を利するなり」。

「同事」。「同事といふは、不違なり。自にも不違なり、他にも不違なり。たとへば、人間の如来は人間に同ぜるがごとし」、「しるべし、海の水を辞せざるは同事なり。さらにしるべし、水の海を辞せざる徳も具足せるなり。このゆゑに、よく水あつまりて海となり、土かさなりて山となるなり」。

この四種は、本学の建学の精神「報恩感謝」に付属する実践項目として具体化させていくように努力したい。

おわりに

本学における「建学の精神」は、明治九年に曹洞宗専門学支校として開学以来、二本柱の

「行学一体」と「報恩感謝」と伝承されている。しかし、実際にその確証となる文書は現在のところない。しかし、「行学一体」は、どうやら当初からあったと思われる。それは数年前まで曹洞宗専門学本校であった駒澤大学において「行学一如」（付随的に「信・誠・敬・愛」）があったからである。なお駒澤大学では、これに関する激しい論議があり、今では無味乾燥な「仏教の教養並びに曹洞宗立宗の精神に則り、学校教育を行うことを目的とする」となっている。同じく姉妹大学の東北福祉大学は「行学一如（自利利他円満）」の文言をそのまま残し、また駒沢女子大学では「正念」と「行学一如」の語句を有している。なお鶴見大学は二大眼目として「大覚円成」「報恩行持」である。他に正眼短期大学と名古屋総合美容専門学校では「行学一体」、室蘭大谷高等学校では本学と重なる「報恩感謝 行学一体」と「自己反省 心身壯建」を掲げる。

この「行学一体」に関し、駒澤大学石井公成教授の論稿「「行学一如」の歴史的背景」（印仏研55巻1号）を参照し、文学部伊藤秀憲教授は、昭和十八年の「教育ニ関スル戦時非常措置方策」（当時の文部大臣橋田邦彦、『正法眼蔵釈意』四巻あり）の文中に「行学一体」の語句が数か所使用されていることから戦時中の学徒動員や集団疎開の標語としていたことを指摘している（『愛知学院大学人間文化研究所報』第34号）。これに対し大野榮人教授は、伊藤教授の説を踏まえつつも、明治時代の曹洞宗諸師（原坦山・大内青巒・大道長安）の所説に「行学一体」「報恩感謝」（大内青巒原著『洞上在家修証義』『行持報恩』）の淵源を見出している（『禅研だより』第13号、2009）。

確かに上述のように「行学一体」と「報恩感謝」の用語は、道元禅師の撰述書中には直接見いだせない。しかし、「行学一体（一如）」に通ずる用語には「身心一如」や「修証一等」があり、また一般仏教の「行解相応」や「依正一如」等〔儒教（陽明学）の「知行合一」〕もある。「報恩感謝」は大野教授の指摘通り、上記の『修証義』成立前後頃であろう。その原典は前掲の『正法眼蔵』行持巻である。

大事な点は、現在の「建学の精神」（行学一体・報恩感謝）を捧持しつつ、その仏教と禅の教えを通じ、学生の人格向上と育成に寄与すること。すなわち自然に対し畏敬の念を抱き、与えられた仕事に全力を尽くし、あらゆるものに感謝し報恩の誠を尽くす「全人的に調和のとれた人間」を社会に送り出すことであると思われる。

参考書

深浦正文著『俱舍学概論』百華苑、深浦正文著『唯識学研究』（上・下）永田文昌堂、水野弥穂子校注『正法眼蔵』岩波文庫、中村元著『広説佛教語大辞典』東京書籍、『禅学大辞典』大修館書店、『総合佛教大辞典』法蔵館、加藤宗厚編『正法眼蔵要語索引』（衛藤即応校注『正法眼蔵』岩波文庫）理想社等